

データサイエンス	【代表的な研究テーマ】 □ 心理・教育データの収集および分析方法の開発と評価
key word	
■ 心理・教育データ ■ 学力テスト ■ 性格検査 ■ アンケート調査 ■ EBPM	課題解決に役立つシーズの説明 私は心理統計学とテスト理論を専門にしています。テストやアンケートによるデータの収集と分析を通じ、人間の考えていることや感じていることをいかに価値のある情報として取り出すかということに関心があります。情報通信技術の発達と普及により「いつ・どこで・何をしたか」という事実に関する情報はビッグデータとして大量かつ容易に集まるようになっていきます。一方、そのような時代にあっても人を評価するのはやはり人であり、態度や意見を直接たずねることの重要性が失われたわけではありません。 ◇ ◇ ◇ 少子高齢化が急速に進む中、地域の活性化はひとえに人的資源の確保にかかっていると言っても過言ではありません。財源が限られている中、確かな根拠(エビデンス)にもとづいて有効な手立てを選び取り、作り上げることが求められています。 個人であれ個人の集まりからなる組織であれ、それを「あるべき姿」に変えようと働きかけるのであれば、「今どのような状態にあるのか」という現状把握と、「これからどのように変わっていくのか」という予測、すなわち正確なアセスメントを行うことが不可欠となります。 一方で、個人の能力、適性、将来性、組織の風土や雰囲気といった特徴は形ある「もの」として存在するわけではありません。そのため、それらの現状や変化を正確に捉えるには様々な工夫が必要となります。例えば、テストによって学力の向上を検証するといった比較的単純に思われるようなケースにおいても、どのような問いによって構成されたテストが「良い」テストであるのか、また時間をおいて実施された異なるテストの結果を相互に比較できるのかといった問題はしばしば直面するものです。 こうした問題は、一見したところ素朴でありながら、実はクリアしておかないとせっかく集めたデータが使い物にならない恐れがある上に、かつ専門的な知識や経験がないと適切な対処が難しい類のものです。個人や組織の特徴という「もの」として存在しないものを可視化しようとする難しさがここに現れると言えます。 世の中は、様々なデータを集めた調査研究や報告書であふれかえっています。しかし、データを取ればそれだけでエビデンスになるわけではありません。エビデンスには「質」が存在し、それはデータの集め方や分析方法に大きく左右されます。エビデンスとしての質が低ければ、それをもとにいくら議論を重ねたところで生産的なものにはなりません。 私は、教育や心理といった人や組織に関わる問題において、質の高いエビデンスをどのように構築するかということについて、データサイエンスの観点から研究を行ってきました。これまでの知識や経験を生かして、政治的なイデオロギーや権威を拠り所とする「理想論」「あるべき論」にとどまるのではなく、冷静に現実を見据え地に足のついた議論ができる土台を築き、人間にとってより明るい未来を創造していけるよう貢献したいと願っています。
	
奥村 太一 Taichi Okumura	
データサイエンス学部 准教授	
【プロフィール】 ●学歴 ・2004 年 東京大学教育学部卒業 ・2006 年 東京大学大学院教育学研究科修士課程修了 ・2009 年 東京大学大学院教育学研究科博士後期課程修了 博士(教育学) ●職歴 ・2008 年 日本学術振興会特別研究員 ・2009 年 上越教育大学講師 ・2014 年 上越教育大学准教授 ・2021 年 滋賀大学データサイエンス学部准教授 【主な社会的活動】 ●所属学会 ・日本行動計量学会 ・日本テスト学会 ・日本心理学会 ・日本教育心理学会 他 ●社会貢献 ・文部科学省「全国的な学力調査に関する専門家会議(分析・活用等 WG)」委員 ・国立教育政策研究所 プロジェクト研究「個に応じた学習指導のための教育データ活用」研究分担者 他 【その他】 ●科学研究費補助金 ・「経時データにもとづく心理尺度の動的信頼性」(基盤研究 C) 研究代表者 他	企業・自治体へのメッセージ 調査データは、多くの人たちの協力によって得られた貴重な資源であり、財産です。使われずに眠っているデータがあれば、その活用法を一緒に考えてみませんか。データは活用されて初めて価値を生み出します。私自身は、これまでに国や自治体の実施した学力調査のデータ分析や、企業の人事・組織関連のデータ分析に関わった経験があります。